

お わ り に

7科目の同じ科目が、1週間にわたって毎日異なる時間帯にくり返して放映された第1期に比較して、第2期では同じ視聴設備を用いて、50科目（延べ54科目）に拡大し、放送大学での実際の放送授業の番組編成に準じた週1回の（ただし3科目は週2～3回）定時視聴がおこなわれた。

視聴学習の経過等については、本文に見られるように、きわめて肯定的な評価となってあらわれている。とりわけ、全15回の視聴者が視聴協力者のほぼ半数に達したこと、一日の平均視聴者数の60%が、定められた放映時間での定時視聴によることなどは、放送授業を視聴する放送大学の学生の実態に比べて勝るとも劣らないもので、さらにこれら視聴協力者が、学習センターまで出かけなければならないハンディを考慮すると、今回の広島の視聴協力者は、大変学習意欲の高い集団であった。このような状況は、序章冒頭に触れたように、放映期間中及び終了後の各種の学習状況の調査に明らかに反映している。

今日、男女中高年齢層の生涯学習のニーズが非常な高まりを見せており、全国各地で教育ソフトの需要が目立つ。放送大学はその重要な担い手として期待され、その全国化が熱望されている。今回の広島での“放送大学ビデオ学習センター”の実験的試行の成功はこのような状況を一つの事例として実証したものといえよう。

謝辞：

本調査研究に積極的に協力いただいた小尾信弥放送大学副学長、稲田勝彦広島大学教授、他関係各位はもとより、本報告書の作成に当り貴重な資料を提供された放送大学教務部学習センター課（旧地方教育課）の皆様心から謝意を表明する。